

University Press, 1994. (E)

Gottfried Wilhelm LEIBNIZ, *Die Philosophischen Schriften von G. W. Leibniz*, herausgegeben von C. I. Gerhardt, Olms 1960. (LEIBNIZ-G)

Duns SCOTUS, *Opera Omnia*, t. II, ed. Vatican, 1950.

## 意見

加藤 信 朗

お三人による提題は熱気あふれる高揚したものであった。年寄りが口挟むべき場所ではないかもしれない。プラトンの『法律』篇には祝祭ではポリス成員がみな神々と共にコロスを踊り、少年たち、青年たち、壮年たちが次々と讃歌を唱い舞うと述べられている。今の提題の三つ巴はまさに壮年の力強い乱舞を見るごとくであった。年寄りは足腰が弱っているのに、踊りには加わらないが、周りで見ていて、意見を述べる、それによって *politike koinonia* の一性が実現されるのである。その囀りになって一言申し上げる。

(1) はじめ川添さんに質問するつもりであった、ところが、鈴木さんのお話を聞いているうちに、川添さんの言われるような中世哲学と近代哲学の区別などはなく、Spinoza 的哲学がその間に一貫していると考えればよいということにもなりそうだった。さらに、村上さんのお話を聞くと、Descartes, Anselmus, Augustinus は一貫しており、ここからもやはり、中世哲学と近代哲学の区別を立てるのは無意味なようにも思えた。(2) でも、ともかく川添さんの問題提起に沿って、川添さんに質問したい。

Pascal は「Descartes は、できれば、神なしに済ませたかった。」といった。しかし、わたしは、やはり Descartes は神なしに済ますことはできなかったのだと思う。この Descartes 哲学に内在する dilemma を西欧近代の哲学者の多くは引き継ぎ、負うものとなった。川添さんにお尋ねしたいことは「いま、わたしたちはどこから哲学をはじめればよいのですか。」ということです。「アキナスからなのですか。その際、*sacra doctrina* から切り離して、*philosophia thomistica* から始めることができるとお考えなのですか。とすれば、アキナスが *philosophus* と呼んだアリストテレスからは始めることになるのでしょうか。」ということだった。これに対する川添さん

の当日のお答えは、*sacra doctrina* から切り離して、*philosophia thomistica* を展開することを努力するべきだという趣旨だった。

終わってから、お三人にそれぞれ小さなコメントを個別に付け加えさせていただいた。(1) 川添さんには、*scala entium* ということを現代の人にわかるように話すのはとても難しいでしょうと申し上げた。(2) 鈴木さんに申し上げたのは、Spinoza の哲学は日本人によって伝統的に親しまれている(波多野精一、出隆など)、それは Spinoza 哲学が Christianity から自由だからだろう。当時、Pantheism と評され、ゲーテほかドイツの文人、哲学者に親しまれたのも同じ理由によるだろう。それは、どなたかも触れられたが、Spinoza 哲学の Jewish 合理主義によるのだろうかということだった。(3) 村上さんには、わたしの質問に関連して、Pascal の言葉に村上さんがどう答えるかが、質問の席上であり、村上さんのお答えは、「それは Pascal の誤解で、Pascal が *Meditationes* をよく読んでいないからだ。」だった。わたしはあとで「でも、*Discours* が一人歩きするということが事実上あったので、そういうこと(パスカルの言葉)はやはり問題になるのではないですか。」と申し上げた。——これらの問題点はすべて今回のシンポジウムでの討論をうかがっていてわたしのうちに形成された問題だった。いずれにせよ、熱気あふれる討論であり、中世哲学会の密度の高さを証明するものだったと思い、慶賀したい。

ただし、帰途、道連れになった熱心な学部生、修士学生から「シンポジウムは難しかった」という率直な見解表明を聞き、なるほどそうかと思った。シンポジウムに今回の学会の頂点があったことは認められても、司会者が触れた原因論とか *causa sui* の話は一般には手に負えなくなるのは目に見えているからである。

---

## 意見 14 世紀スコトゥスやオッカムの存在論の特徴

渋谷 克美

今回のシンポジウムをとっても興味深く聞きました。鋭く明確な口調で、デカルトとトマス、オッカムとの関係を述べた川添氏、中世哲学と近世哲学の合流点としてスピノザを捉え、彼の自己原因概念を詳細に検討した鈴木氏、カントからトマス、アンセルムスへと遡る仕方で神の存在証明について考察した村上氏の御発表は、多くのこと